

道徳科学習指導案

10月21日 校時（5年1組教室）

第5学年1組（30名）

指導者 教諭 ■■■■■■

1 主題名 相手の立場に立って <B 親切 思いやり>

2 教材名 ほのぼのテスト（出典名 教育出版 小学道徳5 はばたこう明日へ）

3 主題設定の理由

（1）ねらいとする道徳的価値について（価値観）

本教材は学習指導要領「B 主として人との関わりに関すること」の（7）「誰に対しても思いやりの心もち、相手の立場に立って親切にすること。」に関わる教材である。同価値項目については、低学年では「相手のこと」、中学年では「相手の気持ち」を考えるという学習を経てきた。5年生においては、そこからさらに相手の置かれている立場や背景、状況まで考慮して、「相手の立場」に立って親切にすることを意識させていく。さらに、様々な相手に応じて、その人にとってどうすることが大切なか考えることも思いやりであるということに気付かせるようにしたい。

（2）ねらいに関わる児童の実態について（児童観）

普段の生活の様子を見ていると、友達が困っているときには手をさしのべる児童が多い。宿泊学習を通して、仲間同士助け合って活動することの大切さについても学ぶ経験を経てきた。

親切にする場面は、困っていることを表に出している人を助ける場合や、困り感が表出していなくても相手のことをおもんばかりで助ける場合や本当に相手のことを考えて助ける場合、さらに相手を助けることで、教師や仲間から自分が認められることを想定する場合、困っていない部分についても助けてしまう場合、親切にする対象だけを考慮してしまい、それ以外の人が困ってしまう場合など実に様々なケースがある。本学級の児童も、「親切・思いやり」という言葉に対する理解度の浅深、実践の多種多様さがうかがえる。本教材を取り扱う中で児童達には、様々な立場に立って考え、誰に対しても思いやりの心をもって行動できる心の引き出しを増やすことをねらっていく。そして、高学年としてのリーダーシップを発揮して下級生と接していくことができるようにさせたい。

（3）教材について（教材観）

本教材は、特急バスでの出来事を通して、様々な立場に立って考えながら相手に親切にするにはどうすればよいかについて考える教材である。普段の生活においてそういった場面に遭遇することはよくあるが、児童の日常とはややかけ離れている教材と言える。そこで、役割演技を取り入れることで「おじいさん」と「乗客」という登場人物の立場について理解を深めていく。また、表を用いて双方の立場や考えの違いを明確にしていく。

また、展開後半の「もし自分が運転手だったらどうするか」考える場面では、出された意見を「おじいさんを第一に考える」「乗客を第一に考える」「両方を第一に考える」の3つに分類する。こうすることで、一見親切ではないと感じる運転手の行動が「両方を第一に考える」方法だったということに気付かせていきたい。

4 校内研との関わり

<研究主題> 児童の実態に応じた「考え、議論する道徳」

～児童の道徳的価値観に対する考え方、感じ方、生き方を善進させる授業づくり～

<研究仮説> 道徳的価値に対する考え方や感じ方、生き方に迫ることのできる発問を工夫していくことや、児童の実態に応じた道徳の授業における議論の形を追究することで、児童が問題を自分事として捉え、善進し、正しい判断をする力が身に付くであろう。

本時の学習では、まず、バスを停めたときと停めないときのおじいさんと乗客の気持ちについて、それぞれの立場に立って考えさせる。その後、自分たちなりの対処方法を考えさせるときには、運転手の立場に立って考えることを伝える。立場の違いを明確にさせる発問を行うことで、児童の思考が整理され、「バスを停める」または「停めない」以外の、おじいさんと乗客の双方を救う考えを引き出すことができると考える。さらに、この問いは答えがひとつではないが故に即答することが難しいことから、必要に応じて近くの席の児童同士で小グループを作って話し合わせる。児童にとってより必要感のある対話の形態がそこで生まれるとともに、自分の考えを仲間にも認めてもらったり、出された意見をグループ内でさらに深めていったりすることで、より多様な意見を引き出すことができると考える。

<<授業における「善進」>>

展開終末の「相手の立場に立って親切にするとはどういうことか」について考えさせる場面では、「おじいさんと乗客の両方を第一に考える」という考えに気付けない児童もいることが予想される。そういった場合でも、「初めはおじいさんのことしか考えられなかったが、乗客のことも考えなくてはいけないからバスは停めない方がよい」等、導入段階と比べて心の引き出しが増えた場合は「善進」と捉えるものとする。

<<「心の引き出し」について>>

授業における心の引き出しについて、次のように定義する。

- ・心の引き出しを「開く」・・・自分の考えを明らかにし、他者に伝える。
- ・心の引き出しを「増やす」・・・対話することで多面的・多角的な考えをもつ。
- ・心の引き出しを「選ぶ」・・・状況や立場に応じ、ふさわしいと思う考えを選ぶ。

本時の展開の中で、これらに該当する場面を設けるようにする。

5 本時の指導

（1）ねらい

別々の立場に立つ人の気持ちについて話し合う活動を通して、相手の気持ちを考えて行動することの大切さに気づき、相手の立場に立って親切にしようとする心情を育てる。

（2）展開

段階	学習活動 (主な発問と児童の予想される反応)	指導上の留意点、指導の工夫、評価(☆)等
導入 5分	1 事前アンケートの結果をもとに、親切にする ことの意味について考える。	・アンケート「親切にするってどういうこと だろう」の結果を示す。
	2 課題について確認する。 相手の立場に立った親切ってどういうことだろう	

展 開	3 資料「ほのぼのテスト」を読み、物語の内容を確認する。	・教科書 P44L6 までのお話の状況について、要点を確認していく。
	4 台町に停まらないとわかったときのおじいさん、乗客の気持ちをそれぞれ考える。 〈おじいさん〉 ・どうしよう。 ・大変だけど元町で降りて歩こうか。 〈乗客〉 ・おじいさんを降ろしてあげた方がいい。 ・きまりだから降ろさない方がいい。 ・他のお客さんの迷惑になるから降ろさない方がいい。	・おじいさん、乗客のそれぞれの立場での考えを表にまとめて板書する。 ・乗客の立場では、特急のバスであることから「目的地まで急ぐ」立場もあることを想像させる。
32分	5 バスを停めたときと停めなかったときのそれぞれの状況では、おじいさんと乗客はどんな気持ちになるか、役割演技を通して考える。 開く ○バスを停めたとき 〈おじいさん〉 ・よかった。 ・他の乗客に申し訳ない。 〈乗客〉 ・おじいさんよかったね。 ・ルールやぶっていいのかな。 ・自分は急いでいたんだけどなあ。 ○バスを停めなかったとき 〈おじいさん〉 ・どうしよう。 ・ルールだから仕方がない。 〈乗客〉 ・おじいさん、かわいそう。 ・ルールだから仕方がない。 ・急いでいたから、よかった。	・児童が乗客・おじいさん・運転手となり、役割演技を行う。 ・表（後述）にしてまとめることで、それぞれの立場の違いを明確にする。 ・「ルールだから」の考えが児童から出てもよいが、道徳的価値「規則の尊重」に話題が移らないように留意する。 ・バスを停めても停めなくても、誰かが困ってしまう状況であることを押さえる。
<p>【仮説の検証場面】</p> <p>6 もし自分が運転手の立場だったらどうするか考える。増やす</p> <p>もし自分が運転手だったら、どうしますか。</p>		
		<p>・運転手はおじいさんと他の乗客の両方のことを考えなければいけない立場であることを押さえる。</p> <p>・必要に応じ、近くの席の児童間で考えを交流させる。</p> <p>☆おじいさんと乗客双方の立場に立った意見のよさに気付いている。（ノート、発言）</p>

終 末	7 教科書の続きを読み、運転手が「ブレーキのテストをします。」と言った理由について考える。 ・おじいさんだけでなく、乗客のことも考えて言った。 ・その場にいた全員がいやな気持ちにならない方法を考えたから。	・運転手が「ブレーキのテストをします。」と言うことで、三者がどのような思いになったかについて確認する。 ☆運転手のとった方法は、おじいさんと乗客のどちらも困らない方法だということに気付いている。（発言）
	8分	6 今日の学習を振り返り、「相手の立場に立って親切にする」とはどういうことか考える。 選ぶ ・相手がどうしてほしいかを考えること。 ・その相手だけでなく、他のいろいろな立場の人たちのことを考えること。

※ 展開5における表

	おじいさん	乗客
「台町」にはバスが停まらないとわかったとき	・どうしよう ・大変だけれど歩くしかない	・おじいさんを降ろしてあげて ・ルールだから停まらないんだ ・（自分は）急いでるんだよなあ
バスを停めておじいさんを降ろす	・ありがとう ・他のお客さんに申し訳ない	・おじいさんよかったね ・ルールをやぶってもいいのかな ・早く走って欲しかった
バスを停めずにおじいさんを降ろさない	・ルールだから仕方ない ・どうしよう	・ルールだから仕方ない ・おじいさんかわいそう ・（自分が）間に合う
「ブレーキのテストをします」	・ありがとう ・助かった	・テストじゃあ仕方ない ・おじいさんよかったね

6 板書計画

